2023/09/23

「色彩心理フォーラム’23」記録
第二部後半　ロマナ＆アンドリーの本の紹介
～ウクライナからの避難者の発言まで

※***太字、斜体*** は発言内容に関する解説。
※発言に関して、意味が分かりやすいように一部補足した箇所があります。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

司会者から2冊の絵本『戦争が町にやってくる』『旅するわたしたち On the Move』（共にブロンズ新社刊）の紹介後に。

ロマナ： この『旅するわたしたち On the Move』の本が計画されたのはコロナが始まる前なのですが、本格的に作業に関わり始めたのは、完全に家から出られなくなってしまって、旅行もできなかったときに、動き、行動することの大切さ、他の世界と接する機会を持つ大切さ、他人の世界を知る大切さというのを実感してからです。

アンドリー： これは、旅をしている人たちの本です。今は10カ国語に翻訳されています。右上はフランス版で、自転車に乗っている人を黒ではなく、オレンジにしましょうという出版社からの要望があったので、この作品だけ他と若干違います。

ロマナ：日本語版が一番気に入っています。
この本を見ると、一番印象に残るのは完璧なバランスです。あと、表紙の黄色の帯がとても対称的で、すぐ目を引くような作品ですね。

この本をテーマに、ロマナ&アンドリーは各国で子どもたちのためのワークショップを行っている。その様子を写したスライドを紹介して。

ロマナ： さまざまな国で今まで開催されたワークショップの写真です。
大きな形を作るのがとても好きで、そのときに色々なテクニックを使うことも好きです。
このワークショップの中では、版画のようなテクニックが使われています。

ロマナ： このワークショップは7月に開催されました。場所はウクライナのキーウです。このときキーウが激しい攻撃を受けていたのですが、子どもたちにもこのワークショップを楽しんでやってもらいたかったので、安全なタイミングをみて開催しました。
このワークショップの特徴は、最初に白い紙に太いマーカーで破壊された建物や破壊されたウクライナの世界を一部だけ拡大して描き、子どもたちに色を加えてもらい、「この世界に帰ってきましょう」***（再生させましょう）***というのがテーマでした。

このワークショップは私たちにとって特別なものです。戦争のときに、子どもたちに安全な場所を提供して、一緒に作品を作っていくのが私たちには大きなテーマでした。

アンドリー： 壊された世界が描かれていたにも関わらず、子どもたちが自分から進んで鮮やかな色やお花や、カフェや動物を付け加えて、壊された世界を再建していく姿が、とても感動的でした。

ロマナ&アンドリーが最近、制作したポスターを見せながら……

ロマナ： これは私たちの最近の作品です。キーウで開催されたポスターの展示会に出した作品のひとつです。私たちのアートは、社会問題というところにスポットライトを当てています。今回もこのポスターで表現したのは、私たちは大変な状況にも関わらず、ウクライナは抵抗して必ず勝って、必ず強くなるというメッセージです。
ポスターの真ん中にある黒い線は、シールドです。半分壊れかけているように見えますが、実際にウクライナの人たちは一生懸命踏ん張って、抵抗しています。

末永： 子どもたちに向けたワークショップをやったり、また絵本を作るという活動そのものが、子どもたちに何かを伝えたい、感じてほしいということだと思うのですが、お二人が、子どもたちに関わる活動をされているのはどうしてなのかをお話ください。

アンドリー： 子どもたちとやり取り（交流）するのがとても大好きです。子どもたちと話すことによって、彼らが私たちの作品をどういうふうに受け取って、どういうふうに反応してくれるのかを知りたいときに、子どもたちと話す機会を作ります。
『戦争が町にやってくる』を出版したあと、色々な子ども、色々な保護者から手紙をもらいました。それで初めてこの本が大きな影響を与えているんだな、というのがわかりました。子どもたちからもらった手紙や絵は私たちにとても貴重なフィードバックになりました。

ロマナ： この本のもう一つの大きな役割として、さまざまなチャレンジプロジェクトに参加しています。その募金活動のお金は、ウクライナの子どもたちの支援に使われています。私たちアーティストとしての一番大きな課題は、ウクライナから避難している子どもたちが、安全にウクライナ語で本が読めること。あと、途切れなくコミットすることです。

江崎： ロマナ&アンドリーさんたちは、爆撃があると地下に避難するという生活の中で創作をされていたと聞きましたが、今はどのような状況でしょうか？

ロマナ： 私たちの故郷のリヴィウは、前線から約1,000キロ近くのところにあるのですが、毎日のように攻撃を受けているので、警報がなったら必ず安全なシェルターに逃げるようにしています。けれどもその時間がもったいないので、シェルターに逃げるときでもなんらかの活動ができるように、効率的に時間を使っています。

アンドリー： この17ヶ月の戦争生活の中で、自分の人生にストップをかけてなにかを待つということは、あまり良くないと思いました。ウクライナに安全な場所はどこにもありません。

この大変な状況の中、攻撃の中でも前に進まないといけませんし、今やっていることはすべてウクライナのためで、ウクライナに繋がると思います。
今回のこの機会はわたしたち、そして自分にとっては特別なイベントです。なぜかというと、今ウクライナで男性は出国するのは大変な手続きをやらないといけません。今18〜60歳は出国禁止になっているので、許可が降りたとしても必ずしも海外に出られるわけではありません。なので今回この場を借りて、戦争の経験者として語れることに感謝します。

江崎： 本当に大変な思いをして日本まで来ていただいたことに、逆に私たちも感謝をしたいと思います。今のお話で、大変な状況にあっても、やりたことをストップしてはいけない、やり続けなければいけないという言葉は、私たち全員に響いたかと思います。
会場には、ウクライナから日本に避難をして来られた方も参加されていらっしゃいますので、どのような状況で日本に来られたか、そして今、どんな生活をされているかというのをどなたかにお伺いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

ウクライナの避難者の女性の発言： 自分から日本に行きたいとは思わなかったのですが、仕事ができなくなってしまいました。すべての産業がストップしてしまいました。
大変なところから離れたいというきっかけとしては、ある朝起きたときに、窓が少し開いていたのですが、「シュッ」という不思議な音を聞いてなんだろうと思って外を見ると、空にミサイルが飛んでいるのを自分の目で見たのです。その瞬間が自分にとってはトラウマになって、しばらく窓から外を見るのが怖くてできませんでした。
実際に当時は仕事がしばらくストップしてしまい、数カ月間休業になるのではという話があったので、その頃から、その時間を使って子どもたちとの時間を過ごそうと思いました。自分にとって大事なことは後回しにしてはいけないと強く感じたのです。戦争でいつ何が起こるのかわかりませんので、やりたいこと、会いたい人、大切な人と時間を過ごすことを後回しにするのではなく、やりたいときにやるべきだと思いそれをやってきました。
ウクライナ人にとって日本はとても神秘的で遠い存在です。住むような所ではないと思っていたので、まさか自分がその国に住むことになるとは思いませんでした。そういう計画は最初からありませんでした。けれどもその8ヶ月の過剰なストレスで重い病気にかかり、1ヶ月間治療を受けていました。ありがたいことに体調が良くなってきて、生活も落ち着きました。
自分の母国とは文化や言葉が違う中で生活するのは簡単ではないのですが、日本人のウクライナ人への支援のおかげで、こういう生活ができるのはすごく感謝しています。ありがとうございます。

江崎： ありがとうございました。

======文字起こし文責・国際アートセラピー色彩心理協会＝＝＝＝＝